熊本に集まり活動開始

熊本地震の本震の翌日である十七日（日）の夕方、数名の教役者と信徒が熊本に集まり、約二十軒の被災信徒宅を訪ねました。その結果、翌週のゴールデンウィーク前に教区の教役者が集まって、現状を知り、信徒宅の訪問や手伝いをすることになりました。

私は二十六日（火）から出かけましたが、普段なら三時間で着く宮崎から熊本までが、五時間でやっと到着。驚いたことに、隣との間のブロック塀が倒れてしまっていて、簡単に熊本聖三一教会の敷地に入れるようになっていました。月曜日から牧師館の片付けに来ていた李相寅司祭から留守番の引継ぎを受けて彼を見送ると、教会の風呂を借りに来られた信徒の方から現状の話などを伺いました。

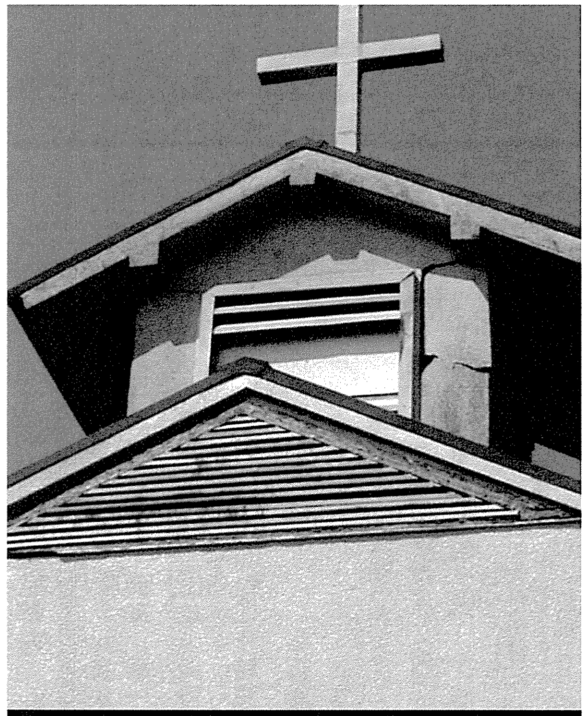
駐車場に沿った塀が、右側の看板の前にはない

夕方には支援室長の柴本司祭が長崎の信徒と来られ、降臨教会で礼拝してきた熊本の牧師山崎司祭たちも帰ってきました。そして夜遅く、京都教区の出口崇執事が来られ、翌日の計画などを話し合いました。

二十七日は鹿児島の中島司祭夫妻と信徒八人でたくさんのお弁当を持って手伝いに来られました。ところが降臨教会では老人ホームの方が亡くなり、山崎司祭はお通夜と翌日はお葬式ということになり、福岡からの壱岐司祭と中島司祭、出口執事と私が菊池黎明教会の信徒訪問。柴本司祭と数人は熊本の信徒宅の片づけや訪問、また数人は降臨教会の納骨堂掃除、そして熊本の教会の整理などの役割分担をして出てゆきました。

菊池黎明教会は、鐘楼にヒビが入り、礼拝堂は使えなくて、十七日と二十四日は礼拝ができなかったそうです。そして五月一日には、中山弥弘さん宅で礼拝をしたいということでした。私は四人のご婦人を訪ねましたが、家は片付いていて、改まって向き合うと、今まで聞いていなかったような、数十年前の辛かったり楽しかった思い出をいろいろ伺うことになりました。

熊本の教会へ帰ると、神戸教区の瀬山会治司祭が鳥取県の米子から、青年たちのボランティアを送り出す準備のための、実情視察に来られました。そして、阪神や東日本の大震災の経験から、大変意義ある話を聞くことができました。ボランティアを受け入れる教会も被災者なので、そのような来客のために最初から仕事を用意することは難しい。だから宿泊さえさせてもらえたら、先ずはその街の社協（社会福祉協議会）で、どのようなボランティアができるか聞く。次に他の教派で組織的に行っているところがあれば、そことのかかわりを持って協力する。自分たちの教派の手伝いはその後に来る、というのです。


ヒビの入った菊池黎明教会の鐘楼

私たちは、自分たちの教会から活動を広げてゆく、ということを考えます。それは被災した教区としては当然のことですが、他の教区が被災地の教区教会に「仕事はないか？」とやってくるのは、当事者を苦しめることになり、また他から入ってくるボランティアに、やりがいのある仕事を提供できない、ということなのです。

1階がつぶれてしまった5階建てのビル

その夜は、福岡から中村司祭到着。五年後の夢委員会を終えた李浩平司祭が来られ、七月の代表者会が来年の三月に延期になったことを知らせてくれました。

翌二十八日には福岡から武藤主教夫妻や濱生司祭夫妻も来られ、熊本の信徒の訪問や、被災地に物資を運ぶ仕事を分担しました。中村司祭の案内で、瀬山司祭と出口執事は市の福祉協議会へ行かれました。私は李浩平司祭と一緒に、熊本聖三一教会の四人の信徒宅を訪ねることになりましたが、ひとりは高齢で一人暮らしだったので、東京の娘さんのところへ移られていました。他の三人から実情を聞くと、車で幾晩か過ごした話や、水道が止まったので、近くの小学校のプールの水を持ち帰ってトイレなどに使った話。またガスが来ないので、友人からのアドバイスで、IH（誘導加熱）の電磁調理器を購入して使っている話を聞きました。聞いている間にガス屋さんが家の点検に来られて、問題がなければその日からガスが使えるような話でした。聞き取りをしている間に、近くの被害の話もしてくださり、五階建てのビルの一階が完全につぶれて、四階建てのようになっていること。一階は事務所だったので、地震が昼間に来たら、犠牲者が出ていただろう、という話を聞きました。

李司祭と帰りに周辺を見ていると、それらしいビルがありました。また、熊本城の様子を知りたくて、行ってみると、坪井川に沿った長塀が倒れたり、飯田丸五階櫓の石垣が崩れたりしていました。昼食にファミリーレストランに寄りましたが、メニューが限られて営業しているのに、改めて驚きました。

私はこの日夕方宮崎に帰りましたが、その後、週末は久留米の中野司祭が来られ、奉仕してくださいました。他にも多くの奉仕者があるのですが、私の気づいた範囲での報告です。今後も多くのボランティアが求められています。

（文責・小林史明）

太田執事逝く

療養中であったフランシス太田国男執事は、五月十三日、肝不全のため、熊本県の菊池恵楓園内の病棟で亡くなられた。

十五日通夜の祈り。十六日葬送告別式が行われた。享年八十四歳。追悼記事は次号に掲載します。

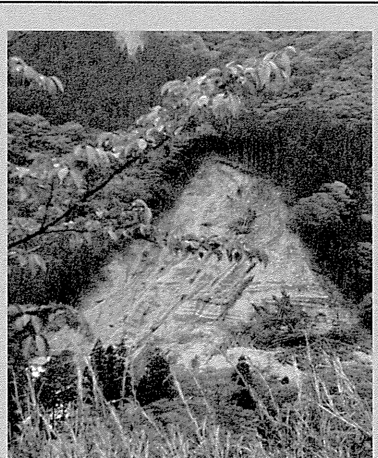
阿蘇方面を訪ねて

五月五日（木）午後は阿蘇方面に向かいました。

途中、西原村に入るとブルーシートを被った家が増え、道路脇には巨大な岩石が転がり、道路の亀裂や段差が多く見られました。そうした中、立派な鯉のぼりが泳ぐ姿に、力強く歩みを進めようとしている被災者の心意気が感じ取れました。

阿蘇は至る所で土砂崩れの跡が見られ、特に阿蘇大橋を崩落させた部分は遠くからでも確認できました。

大きな被害を出した南阿蘇村に住む菊池黎明教会信徒のご夫妻は、太く強固な丸太で作られたログハウスのご自宅が被害を免れご無事でしたが、それでも今回の激しく長かった揺れで味わった恐怖は相当なものだったそうです。ご近所で声を掛け、助け合いながら、その後数日間を過ごされました。そしてあまりにも自分達の便利さを追求しすぎた人間が、ガスも水道も電気も携帯も車も無い生活に立ち返るよう、今回の地震は教えてくれた、というお話が印象的でした。今後このご夫妻は唯一残された迂回路を使って、これまでの倍の所要時間がかかるけれど、教会に通い続けられます。それぞれに被害の大小はあれ、同じ震災の体験をした熊本の兄弟姉妹はさらに結びつきが強められ、支え合っていくことを確信しました。



（熊本聖三一教会　島　優子）

〈facebook から転載〉